『米百俵』

彼が仲人した新潟のひとから米一俵が送られてきた。都内に住む子供たちに集合をよびかけ、おごそかに言った。「日本一の米を皆に分けてやる。こしひかりだ」。子ら口をそろえて「お父さん、私たちそれ毎日食べている米よ」。子らは特選米、親たちは標準米—よく見かける風景だ。「もうお前たちにはやらん。お母さーん、とり戻せ！」

彼はそういう男。新潟の米—山本有三の名作『米百俵』を連想さす。幕末飢餓状態の長岡藩に親類藩から米百俵が寄せられた。一握りずつでも分配をとの声を抑えて、大参事小林虎三郎はそれを金に換えて人材養成の学校創設に当てた。そこから山本五十六らの人材が輩出している。

それと少しだけ似たことが彼にもある。敗戦、彼が帰国したら故郷沖縄県はなくなっていた。占領軍の威圧の前に、政府はもちろん、本土で困窮する県民救済にだれ一人立たない時、身命を賭してその事業を一つ一つ進めていた。とくに一切の援助を絶

たれた学生数百人は悲惨を極めた。「十年後の新生沖縄の指導の中核に空白を作ってはならない。若者たちが安心して勉強できる環境を」と、八方に手をつくし、ついに資金を集めた。すると、その金めがけて、学生の間から自分たちに分配せよと、闇討ちまがいの脅迫要求が相つぐ。彼は一歩もゆずらずついに学生寮を完成した。それが今も続く東京狛江の寮である。

彼は死んだ。名は吉田嗣延。運の強い男だった。幾度も命を拾っている。帰国するとすぐ沖縄に密航、県庁に乗り込んだ。知事たちは占領軍を恐れて会わない。しかし、吉田が来たというわさで、庁内数百人が押しかけ、その騒ぎで米軍につかまり銃殺決定。米軍は執行前に知事ら県幹部に、彼は沖縄に役立つ男かと問うたら、全員が「役に立つ」との答えで、救われる。二十四時間以内の退去命令。彼に託された、本土に疎開したままの親類たちへ便りは六千通。

（一九八九年九月二十七日）